

山陽小野田と和泉式部

あらざらむ此の世のほかの思ひ出に今^{いま}一^{ひと}たびの逢ふこともがな

和泉式部

(現代訳) もうすぐ私は死んでしまうでしょう。あの世の思い出として、せめてもう一度だけ、あなたにお会いしたいものです。

和泉式部は、百人一首の歌人の中でも、もっとも恋多き女性といわれています。夫がいる身でありながら、為尊親王(ためたかしんのう)と恋に落ち、為尊親王の死後、弟の敦道親王(あつみちしんのう)と愛しました。しかし、敦道親王も亡くなります。恋人と死に別れ、激しくも悲しい恋を重ねたからこそ、自分が病にふせたとき、愛する男性に会いたいという恋心を詠んだのでしょう。「世」には男女の仲、「逢ふ」には男女が一夜を共にするという意味があります。

埴生には、和泉式部の墓と伝えられる墓碑があります。山陽小野田の郷土と恋に落ち、一女をもうけ、当地で一生を終えたという伝説もあります。和泉式部の墓と伝えられるものは、全国に10ヶ所以上あります。ドラマティックな和泉式部の生き方が多くの人を魅了した証拠ですね。

小野田高等学校小倉百人一首かるた部顧問 青池のぞみ